

COLUMN

1

「マグネットスペース」でコミュニケーションを活性化。仕事のアイデアが生まれ、人材定着率も高まる。

オフィスづくりの際の一番の課題は、社員同士のコミュニケーション。「マグネットスペース」を設け、あえてアナログ的なツールを置くことをドウマ株式会社代表取締役・小澤清彦さんはすすめる。オフィスづくりのポイント、総務が身につけるべき能力について話を伺った。



小澤清彦 (おざわ・きよひこ)
 ハーバード大学設計大学院設計学修士取得。設計事務所などを経て、2010年、オフィスのコンサルティングを行うドウマ株式会社を設立、代表取締役。外資系及び日本企業のワークプレイスコンサルティング、プログラミング、設計を手掛ける。

「マグネットスペース」でコミュニケーションを活性化
 仕事と無関係な話が会話に三、四割混じっているほうが、コミュニケーションも業績もいいとデータとしても出ています。

場所やしつらえの持つメッセージ性は思っている以上に強い。それを経営に生かさない手はありません。メッセージを送っても社員が理解してくれないと嘆くなら、まずは「場所を変える」。壁を壊すなんて、人の心の壁を壊すよりはるかに簡単です。

オフィス環境は経営のツールとしても重要

女性のリクルーティング支援をする会社のオフィスを手掛けたことがあります。ぱっと入ると、まずキッズコーナーが見えるようになっていました。そのオフィスに来るのは、子育て中の女性が多いので、会社のメッセージが一目で伝わり、彼女たちに、子どもがいても働けるという安心感を与えることができるのです。経営上ではそうしたイメージはあっても、オフィスのスタイルで表現するということは考えていなかったでしょう。

社員の想いを引き出し、まとめあげるファシリテート能力を培ってほしい！

オフィスをつくるときの一番の課題も、社員同士のコミュニケーションが取れるかどうか。そのため、私は「マグネットスペース」を設けて、そこにアナログ的なコミュニケーションツールを併設することを提案しています。マグネットスペースとは、社員の動線が交錯する部分に、あえてコピーをいれる場所やコピー機を置くことです。

たとえば、そこに壁新聞を張り、それぞれの部署が何をしているかを書き込むとします。そうすると、隣の部署の動きが伝わり、会話量が約2倍になります。そこから仕事のアイデアも生まれるでしょう。ひいては人材定着率アップにもつながります。飛躍していると思われるかもしれませんが、人と人との親密な関係があれば、それほど簡単に人は離れないものなのです。

さまざまな企業で、優秀な人材が他社に流れることによる情報流出が懸念されています。そうしたリスクを感じたり、経験した企業は五九%にもなります。情報流出のリスクを気にするなら、こういった形で情報のセキュリティを高める方法もあるのです。

ベストなオフィス環境は、実は社員が一番知っている

調査をした実感ですが、社員たちの意識は意外なほどエゴイステイックではありません。きちんと会社の利益やエンドユーザーに目が向いています。

以前、ある企業の経営陣から社内雑音に

ついて相談がありました。そこで、社内の調査をしたところ、ほとんどの社員にとって問題は雑音ではなく、会社のブランディングができていないということでした。経営側は社員にとっていい環境を提供しようと思っていいる。一方、社員は、ユーザーや取引先が利用する受付などの場所を立派にしてくれた方が、自分も仕事がしやすいと思っていた。このすれ違いは不幸です。みんなの思いをすべて出し合い、コンセンサスを取ってから、オフィスづくりの方向を決めるのが一番いい方法です。

依頼先で、ワークプレイスに関するアンケートをすると、最初は「どんなところでも働けるから贅沢は言わないよ」という職人気質的な回答が多い。でも、よくよく聞いてみると、実はいろいろなアイデアがある。もっとも生産性が高く、効率的な働き方についての知恵を一番持っているのは働く社員たちなのです。

つまり、いいオフィスをつくるためには、オフィスづくりの担当である総務が、みんなの想いを顕在化させればいいのです。そのためには、全員に意見が言える機会を均等に与え、本質的な思いをうまく引き出し、まとめていくファシリテートの能力を磨く必要があります。

オフィスづくりの観点からいえば、今後の総務にはこの能力が求められているのです。

(談)